

## 古代印度精神史上に於ける

## 非アリヤン思想の展開

## 服部 法 丸

侵入アリヤン民族に依つて形成せられたアリヤン思想は、その思想下に於ける一聯の時期として古代に於ては梨俱吠陀時代、質書時代、與義書時代の三を劃して居る。

然し此の三時期を通じて永せる思想的な特色はそれが梨俱吠陀末期に現はれたる雨爾神話に起源し、遂に與義書に到りて一元論的転変説となつて発達した処に在る。又此等の期間全体の印度思想史上に於ける特異は、それが純印度思想を代表すると云う事でもある。蓋し此の期間の思想は、印度への移住以前をも含めて、アリヤン人種の中に自然に発生したもので、民族思想の結晶とも云い得るものである。勿論婆羅門の徒が、人爲的解釈を加へて染まらしたものは相違無いが之も社会組織上、自ら発生した傾向として自然に此処に到達したもので、一人若しくは、一宗特定の主張が勢力を占めた結果では無い。以来印度には、諸種の思想が輩出したが、民俗的信仰を代表するものとしては、此の期間のそれを挙げねばならず、又此期の思想が後代の印度諸教派の思想に對して、何等かの形で常に關係を有していたと云う事も、その原因は此の期の思想が實に印度民族思想の代表であつたが故に、大いなる権威を有していた爲であらう。

私に此の期の思想が印度民族特にアリヤン民族思想である事を前述したが、次に同じく此の期に有つて此のアリヤン民族思想の系統に對して古い伝統・慣習・與俗弄社会的な一切の束縛を離れた獨立せる個人としての、快言すれば一人間としてのアリヤン人の持つた一聯の思想系統が存している事を見逃してはならないと思つものである。

即ちアリヤン民族として一つの大きいなる集團として取扱はれる場合、その民族としての伝統・慣習・風俗等について大勢の赴く処を民族思想として解釈する事は正しい事であるが、然し彼等として民族を離れ一人人としてこれを觀察の對象とした時、彼等の一人一人の持つてゐる民族として吾々が今日取扱つてゐるそれと全く合致すると云ふ事は有り得ない事である。私は茲に前述の如く、アリヤン民族の形成した思想を、アリヤン思想と云うに對し、斯くの如く民族集團を離れた個人としての彼等の思想を非アリヤン思想と命名致し度い。

此の非アリヤン思想なる名称は侵入アリヤン民族以外の常住民族、即ちカース、ムスル曼と呼ばれる主としてドラビタ民族の形成せる思想と見られて来たが、私は之と異つた意味に於いて此の非アリヤン思想なるものを規定するものである。然して、アリヤン思想は吠陀を産み、舊書を形成し、與義書へと發展したのに對し、此の非アリヤン思想は如何なる至路を辿つて發展したのであらうか、次に右時代に於けるその位置を觀察致したい。

非アリヤン思想の起源を、先ず私は梨俱吠陀に於ける哲學思想興起の要因の中に發見する。抑々梨俱吠陀の自然神觀の中には、それ自身中に破綻を全す可き幾多の要素を含んでゐる。特に多神中に、統一的中心の無き事はその決定的なるものである。或る時期に於いては、包摂神フルナが、中樞的地位を占めんとしたが、遂に此の神は最高の創造神に違ふ事が出来ず、帝神

インドラに至つては、アリヤン民族の主護神として非常なる人氣を博したけれども、<sup>①</sup>普遍常住の性質を欠き、遂に最高神とはなり得ず。その外自然神中には一神として宇宙最高の原理たる可き賓格を有するものが無かつた。而も人間の至奥の要求として思想の進歩に従つて必ず最後の統一は望まれるものである。此の爲に早くより此の欠点に就いて一方には此等の自然神に対して不信懷疑の態度を示すものが出、他方習神を一元に歸さんとてその欠点を補はんと企圖する者も出たと見られる。又法典中に於ける記事は<sup>②</sup>天・地・人・神・鬼・畜・鳥・獸・魚・蟲・昆蟲・植物・動物・無生物・無神論者、無神論者を排斥して居るが、此の時代には有つて早くも斯る人々の存在を私に感ぜしめる。

私は此の懷疑思想と、第一思想の二つの梨俱吠陀に於ける哲學思想興起の象徴の中、前者を當時のアリヤン人が何々に抱ける神への懷疑を吐露せるものと解し度い。梨俱吠陀の中には、<sup>③</sup>可の恐るべきもの（因陀羅）に就いて人々は疑ふて居る。彼れ何処に存在するかと、他のものはまた彼れ存在せずと云ふ<sup>④</sup>と有り、又<sup>⑤</sup>コインカラは存在せず何人か彼を見し、彼を讃嘆するも河の神<sup>⑥</sup>と云ふ明らかなに彼等の主神に對して疑いを抱ける者の存した事を示している。今私は以上の如き聖典に依り、此の梨俱吠陀に於ける懷疑思想こそ神の存在を信じ、天啓を奉じてアリヤン思想に對する非アリヤン思想の刺激と見るものである。

次に後書時代に於ける三大編纂<sup>⑦</sup>の出現は、以後アリヤン思想系<sup>⑧</sup>、婆羅門思想、非アリヤン思想系<sup>⑨</sup>、非婆羅門思想と呼ぶにふさはしき状態を築き上げたのである。即ち此の期に至れば梨俱吠陀時代の末期に現はれた「衆人の歌」<sup>⑩</sup>、<sup>⑪</sup>等の思想を具體化するものとして、四姓制度が制定せられ、婆羅門と稱する特殊の最高階級に依り宗教は独占せられ、伝統に疑を抱ける者は婆羅門を信ぜざるものとされ、梨俱吠陀に於ける神は今や梵書時代に於ける婆羅門の発祀

に依つて左右される運命となつた。二種の神あり。神は神なり。学識あり吠陀に通曉せる婆羅門は人間の神なり」と云う預書の記述は④比尋の半部をよく物語つてゐる。然し神を認め、吠陀を奉ずるアリヤン思想が婆羅門思想の右の下に統一せられ社会に於ける最高の地位と占めたに對し、非アリヤン思想は此の期に於いても前期と同様に社会的には急流を続けたものと思はれる。

次いで奥義書時代に到れば本来奥義書は、形式上預書の一部をなすものであつて、正しくアリヤン思想即ち婆羅門思想の産物で有りながら、稍もすれば非アリヤン思想即ち非婆羅門的鋒鋭を顯はしてゐる。

即ち婆羅門思想の特色は前述の如き三大綱要に歸さるるに對し、奥義書は大体に於て之を認容し乍ら、<sup>ア</sup>後の真相を説く段に厥ると寧ろ之を否受するが如き傾向が認められる。三大綱要の一たる吠陀の確證を否定した例としては、*パールニ Anand* の子、*シユウ、エータケーツ*

*Aratake* が十二年同師の下に有りて、吠陀を學び盡したるも、我に關しては何事も知る処が無かつたと云うナヤンドギヤ奥義書④の記述、及び同書に婆羅門ナラ外が、聖神サナトクマール *Sanat Kumara* に自己の學習した智識の種類を挙げて四吠陀以下十六種を挙げたのに對し、クマールは是等を以て凡そ右目の學問で眞実の我の學に非ずとて拒否した①と云うが如きである。是等は明らかに既即ち我に關する最上智に對して吠陀は最後の証判に非ずとの義を示せるもので、到底婆羅門思想の絶現とは思へ無い。既即ち我が奥義書に於ける最高のもので有り、吠陀を以て天啓即ち絶対となす婆羅門思想とはその立場を異にするものと云はねばならぬ。



次に三大綱等の第二婆羅門至上主義に對する態度を見れば婆羅門を最高の師主とする思想に至つては更に動搖が激しい。フリハドマーラ又ヤカ與義書に依れば⑬フラマハナ *Prasiddhanta* デヤイウアリ王が婆羅門アールニに輪廻の教義を教へて最後に曰く、「ゴータマよ、汝が余に云へるが如く、此の教義は今日迄嘗て婆羅門社会に知られざりき。こゝを以つて世界に於ける政治の權が遂に刹帝利族に歸するに至れり。」と有り、明白に婆羅門族の教學的、政治的地位の失墜を物語り實質的には婆羅門至上主義の倒壊で有る。

又三大綱等の第三衆徒万能主義に對しても、斯くの如き傾向は感じられ、フリハドマーラ又ヤカでは「衆徒に依りて祖先界に入り（輪廻界）知識に依りて、天界（不死界）に到す」と云ひ、又チヤンドーギヤでは「吠陀を學び祭祀を行する者は天界（ここにては輪廻界）に入り然に往するもののみ不死を得」と云つてゐる。是は普通の祭祀や若行に不満足を表はし、之を排斥しない迄も、その如衆徒を制限し若しくは之に對して意義を与へんとした証據で、同じく純粹のアリヤン思想の發現とは見られない。

以上は三大綱等を中心として與義書の中で特に非アリヤン思想的なるものを眺めたのであるが、前述の如く與義書は表面上は婆羅門思想の產物であり乍ら、之を實際に促進した原動力は却つて非婆羅門的傾向即ち非アリヤン思想であつたと云い得るのである。然も此の期に有つては由來印度の思想、宗教、哲學の全分野に亘つて絶對的權威を誇つていた婆羅門族に對して高と力と加うるに思想的に自由なる刹帝利族が思想界に進出する事も、見逃し得無い事である。敘事詩に説かるるが如き全土に亘る大内亂も、此の期になると終焉を告げ刹帝利族を中心とした勢力は盛んに成長をなし、仏典⑭に紹介される十六大國⑮の國々が當時、コーサラ、マガダ

ラムサ、アムンティの各國を中心として有力なる君主國、或は共和國の形態を以て、全土に拡がつていたと云う説に従へば④時代の指導權が亞羅門族より刹帝利族へと移つた事が、又思想的には保守より革新へと變化をなした事が確證され得るのである。

然してマカサ等の四大國は以前は吠舍と首陀との混血種の國として、アフカニスタンの種陀羅と同様に外國視された國で④、思想的には婆羅門に反抗せる人々を包收した國であり、爲に住民の間には非アリヤン思想が移植せられて居り、此の非アリヤン思想と一方アリヤン化されて居らない印度原住民の思想とが新しい權力者、刹帝利族と結合して與義書の思想傾向を促進させ得たもので有らうと思はれる。

以上の如くして非アリヤン思想は古代印度精神史上に於て辰昴をなしたのであるが、然し大苟的にはアリヤン思想が正統の思想として君臨し、社会的に地位を占め非アリヤン思想は異端者の説として感流をなしていた事は否定出来無い事は否定出来ない事實である。然し人はその精神生活の一面に於て伝承を随從し權威に服さんとするが、他面に於いては常に眞實を求め、革新を得んとするのであり、此の意味に於てアリヤン思想に對して非アリヤン思想の占める地位も、凡人思想の一分野として尊重する可きであらう。然し一度非アリヤン思想の泥濘を表すや、此の非アリヤン思想は時代の脚光を浴びて抬頭し遂にB.C.六世紀より前五世紀に到る時代に於て一般思想界の王者として一時期を劃するに到つたのである。

即ち此の非アリヤン思想が唯物思想と合流した事に依り極端なる及婆羅門傾向を帯び、吠陀を認めざるのみならず、却つて眞向より之を打倒せんとし、所謂大師外道を中心とする及吠陀的運動となり、やがては極端なる唯物論或は快楽説へと進して行つたのである。

## 註

- ① 宗教研究、新才二卷才三号、大正十四年、号中に於ける羽溪了諦氏論文参照
- 2 世界聖賢全集、印度古聖歌全、一二五頁
- 3 同、印度古聖歌全、一四〇頁
- 4 マヌ法典才二章才一及び才十一
- 5 ニ、十二、五、印度古聖歌全、二六頁
- 6 八、一〇、三
- 7 吠陀天啓主義、聖門至上主義、密式万能主義
- 8 梨俱吠陀一〇、九〇、十二、印度古聖歌全、七〇頁
- 9 *Satapatha - Brahmana* 3. 2. 2. 5.
- 10 ナヤンドギヤ・ウパニシャッド六、一、ウパニシャッド全集、才三卷一四五頁
- 11 右、同、七、一、才三卷一七二頁
- 12 ナリハドアーラヌヤカ、ウパニシャッド六、二、才一巻一五五頁
- 13 石、同、一五、十六、才一巻二六頁
- 14 ナヤンドギヤ・ウパニシャッド、ニ、二三、一、才三巻五五頁
- 15 *Anguttara Nikaya* 1. 2. 2. 3. 南伝大藏經、才十七卷三四四頁以下
- (四) 長阿含經尼妙經、大正一、三四、b
- (イ) 中阿含經育王、大正一、七七、b
- (ニ) 優婆塞戒經、大正一、九二、b

(16) 單説人仙聖

大正一、二三、C

(17) 大方等無想聖

大正十二、一〇八〇、A

16 *Anguttara nikaya* の説に依る(1) *Anga* (2) *magadha* (3) *Kadi* (4) *Kasala* (5) *Vajji*(6) *Malla* (7) *Ceti* (8) *Janisa* (9) *Kuru* (10) *Pancala*(11) *Maada* (12) *Suvassana* (13) *Asvaka* (14) *Aravati*(15) *Gandhara* (16) *Kamboja*

17 金倉田照番 古代印度精神史 一五二頁

18 阿闍婆吠陀……木村桑賢 印度宗教史 一四七頁